

賈 晉華

『唐代集會總集與詩人群研究』

齋 藤 茂

大阪市立大學

唐代文學は、中國文學の中でも最も研究の進んだ領域であるが、しかしそれらの研究は限られた時期あるいは特定の文學ジャンルを対象にし、また個々の詩人や著名な作品を取り上げるものが大半を占めてきた。研究方法としては安定している反面、やや新鮮みに乏しい印象を受ける嫌いが無いではなかった。そして個々の詩人の個性を重視するあまり、集團としての活動を軽視しがちでもあったと思う。集團での文學活動は、また遊戯的な側面を色濃く持つ場合が少なくない。文學的な完成度を追求し、それを尺度として評價を加える立場からは、遊戯的な文學作品があまり歡

迎されないという傾向も見られたと思う。しかしたとえば中唐元和期の韓愈、白居易をそれぞれ中心とした二つのグループの活動では、構成員の個性がぶつかり、また文學の遊戯性が巧みに生かされながら、様々な試みがなされている。そしてそれは個々の研究においても、また文學史的な観点からも、極めて大きな意味を持つことが従来から指摘されており、そのことはむしろこの時期を対象とする研究者の常識ともなっている。題詠、唱和、聯句などの座の文學が発達した中國において、集團としての文學の研究は缺かせないものであり、それを通じて個々の作家や作品に戻るといふ手續きが、今後より一層求められてゆくだろう。その意味で、「集會總集」という概念を打ち出して、唐代の各時期の集團的な文學活動に着目する本書が、今後の唐代文學研究に果たす貢献は誠に大きい。我が國の唐代研究に新たな視座を開く端緒となることを願って、この場をお借りして本書の紹介を志した次第である。なお本書に對しては、中國においてこれまでに二篇の書評が公表されている。『唐研究』第七卷（北京大學出版社、二〇〇一年二月）

に掲載された郁賢皓、胡可先兩氏のもの、『中國讀書報』(二〇〇二年一月二六日)に掲載された方隅氏のものである。評者は現在前者しか目睹し得ていないが、そこでの論點とはなるべく重複しないように述べてゆきたい。

二

評に先立つて、本書の内容を簡単に紹介しておきたい。導言において、まず「集會總集」という概念の定義とそれに着目する意義を説く。氏の定義に據れば、「集會總集」とは總集の一種である唱和集のうち、參與者達が一定の期間一定の場所に在って行つた詩歌の唱和及びその他の文學活動を記録したものを言う。白居易、元稹、崔玄亮による『三州唱和集』のような、場所を遠く隔てて行われた唱和集や、靈澈の『僧靈澈酬唱集』のような、一人が長い期間の間に多數の相手と行つた唱和集などは、「非集會總集」として區別されている。さらに「詩人群」という概念についても、従來はそれが「詩歌流派」と混淆される傾向にあったことを指摘した上で、時間と場所を共有しつつ緊密

な關係と影響とを持ち合い、上記の「集會總集」を成り立たせた群體として「詩人群」を規定している。その上で唐代の集會總集と詩人群を個別に取り上げるのだが、全體は大きく三編から成り立っており、上編の「唐代集會總集與詩人群考論」はさらに七章に分かれている。第一章では『翰林學士集』と「太宗朝宮廷詩人群」を取り上げるが、これは許敬宗の詩集の一部と見られる『翰林學士集』の分析を通じて、貞觀年間の宮廷詩人達の活動を明らかにしたものである。そして當時の宮廷詩壇では、北朝と南朝の文學それぞれの傳統を受け繼ぐグループが存在し、互いの長所を取り入れようとしながら、なお相互に融合されるには到っていないかつたことなどを指摘している。第二章では、武平一が編んだ『景龍文館記』と中宗朝の修文館學士達の活動を取り上げる。『景龍文館記』は散逸しているが、現存の資料から可能な限りの復元を試み、修文館の設立とそこでの活動の意義、特に近體詩の形成において果たした役割や詩風の特徴などについて論じている。第三、四章では大曆期の詩人群を取り上げ、三章では『大曆年浙東聯唱

集」と「浙東詩人群」、四章では『吳興集』と「浙西詩人群」について論じている。前者は大暦五年（七七〇）に浙東從事となった鮑防を中心とするグループであり、後者は大暦八年から十二年まで湖州刺史を務めた顔真卿および詩僧皎然を中心とするグループである。ともに散逸している兩集の復元を試みるとともに、いずれも聯句作品を含む點で注目される、双方の活動の特徴を論じている。第五章は『汝洛集』『洛中集』『洛下遊賞宴集』の三集と、白居易を中心とした「東都閑適詩人群」を取り上げる。三つの作品集のうち、前二集はともに劉白唱和集の一部を形成するものであり、また『洛下遊賞宴集』もその大半は白居易の作品であるが、劉禹錫、白居易の二人だけでなく、裴度、李紳、王起、姚合等の参加があることから、いずれも集會總集として捉え、白居易の「中隱」説がいかに實踐され、また周囲の人々にどのような影響を與えたかという點を中心に論じている。第六章は段成式の編んだ『漢上題襟集』と、大中十年（八五六）から咸通元年（八六〇）にかけて山南東道節度使を務めた徐商の幕下に集まった「大中襄陽詩人

群」を取り上げる。『漢上題襟集』の復元を試みるとともに、段成式、溫庭筠を中心として、諧謔的な色彩の濃いこの詩人群の作風についても検討を加えている。第七章は『松陵集』と、咸通十年（八六九）から十二年まで蘇州刺史を務めた崔璞の幕下に集まった皮日休、陸龜蒙等の「咸通蘇州詩人群」を取り上げる。『松陵集』は七百首前後が現存するので、それらの作品の検討を通じて、蘇州詩人群の參集の過程と彼らの文學活動の特徴や意義、および皮陸の文學觀などについて論じている。

下編の「唐代集會總集七種輯校」は、上に挙げられた集會總集のうち、『景龍文館記』、『大曆年浙東聯唱集』、『吳興集』、『汝洛集』、『洛中集』、『洛下遊賞宴集』、『漢上題襟集』について、個別の資料および『全唐詩』などから作品を輯め、校訂を加えたものである。このうち『汝洛集』、『洛中集』は、劉白唱和集の一部として、我が國の花房英樹、柴格朗兩氏による整理がすでになされているが、『景龍文館記』、『大曆年浙東聯唱集』、『吳興集』、『洛下遊賞宴集』、『漢上題襟集』は、これまで輯本としては公表されて

いなかっただものであり、ここで整理がなされた意義は大きい。

そして最後の附編「隋唐五代其他作家群研究」では、上編で取り上げた七つのグループ以外の五つの詩人群について、五章に分けて論じている。すなわち第一章では、隋唐交代期の「河汾作家群」として、王通の一族と陳叔達、薛收らの活動を取り上げ、集會に到る過程や作品の特色などを分析している。とくに王績の詩風とそれが盛唐詩に與えた影響について重點が置かれている。第二章では高宗、則天武后期に總集、類書の編纂に關わった「高宗武后時期三大修書學士群」を取り上げるが、ここでは上編第一章で扱われた許敬宗等の修文館學士群のみならず、則天武后期における元萬頃らの北門學士群、李嶠、閻朝隱らの珠英學士群をも含め、彼らが撰述した『古今詩人秀句集』、『珠英學士集』などの類書、總集に特に着目して、彼らの活動が詩の聲律や作法に與えた影響を中心に分析している。第三章では中唐期の韓愈、孟郊らの「韓孟詩人群」を取り上げ、貞元年間後半の汴州、徐州における集會と、元和年間前半

の長安、洛陽における集會の二回に分けて、それぞれの集會の情況をまず検討し、その上で韓孟の交流と相互に與へ合った影響、および兩者が張籍、盧仝、賈島らに及ぼした影響などについて論じている。第四章では齊己らの「唐末五代廬山詩人群」を取り上げ、唐末の戰亂を避けて廬山に逃れ、あるいは白鹿洞書院で學んだ人々の活動を、前後二期に分け、詩歌を中心に検討している。そして、ここでは賈島、鄭谷が模範とされたこと、彼らの活動が宋初まで續いていったことなどを明らかにしている。さらに第五章では、徐夔らの「唐末五代泉州詩人群」を取り上げ、中原に比べて安定していた福建の地で、閩王の庇護のもとに繰り廣げられた文學活動について、その性格や特徴を論じている。

集會總集、詩人群のいずれも、そのすべてを取り上げているわけではないが、しかし主要なものは網羅しており、唐代の情況を知るには十分な内容と言えよう。

三

次に評者の關心に従つて、論評を加えたい。各章とも内容豊かであり、本来すべてを論じるべきではあるが、それでは散漫に陥る虞があるので、あえて論點を絞ることにさせて戴く。ここでは上編第三、四章の大曆期の浙東、浙西の詩人群と、附編第二章の三大修書學士群、そして第三章の韓孟詩人群を取り上げることとし、本書の章立ての順序に従つて見てゆく。

まず大曆期の二つの詩人群についてであるが、この第二章は賈氏の數編の論文が基礎となつて構成されている。すなわち「皎然論大曆江南詩人辨析」(文學評論叢刊、二二輯、一九八四)「大曆年浙東聯唱集考述」(文學遺產增刊、一八輯、一九八九)「大曆年浙東聯唱集補考」(江海學刊、一五三期、一九九二)「大曆年浙西聯唱——吳興集考論」(寧波大學學報、四卷一期、一九九二)などであり、『皎然年譜』(廈門大學出版社、一九九二)と合わせて、氏がこれまで最も力を注いで來られた研究分野の一つと言つて良いであろう。大曆期

のこの二つの詩人群をめぐる從來の研究としては、たとえば蔣寅氏の『大曆詩人研究』(中華書局、一九九五)が有り、その上編の第一章の九では「鮑防、顏真卿與大曆兩浙聯唱詩會」の項目が擧げられて、聯句を中心に双方の活動が検討されている。また『大曆年浙東聯唱集』については、陳尙君氏の『全唐詩續拾』(中華書局『全唐詩補編』(一九九二・一〇)所收)卷十七で、『全唐詩』『全唐詩外編』に漏れている分の整理がなされている。しかし本書で示された二つの詩人群に對する分析と各集の輯校は、いずれも從來の研究を越えた新しさを持つている。先に輯校について言え、『大曆年浙東聯唱集』では現存の作品を網羅して校勘を加えており、全貌を窺うに便利であるだけでなく、依據しうるテキストを提供する役割も果たしている。『吳興集』の方は、復元の試みがそもそも初めてのことである。個々の作品は各詩人の別集や『全唐詩』などに收められているが、これを精査してその原形を示した意義は大きい。次に二つの詩人群に對する分析では、双方に見られる聯句の制作に注目していることその他、浙東については「憶長安

十二詠」「狀江南十二詠」の二作が酒令及び詞と關連するといふ指摘、浙西については詩會の持つ意義が自覺されたこと、またそこで飲茶など後世の文人趣味に繋がる側面が認められることなどの指摘が、とくに評者の關心を引いた。聯句については、齊梁期以來再びその文學的魅力に着目し、新たな試みを加えて、元和期の韓愈、孟郊及び白居易、劉禹錫らの聯句を導いたことがこの二つの詩人群の功績と言え、氏の検討もそこに重點が置かれている。但しこの點については、後に韓孟詩人群を取り上げるので、そこで合わせて述べることにする。ここでは後に擧げた點を、興味深い指摘として注目しておきたい。鮑防らが行つた「憶長安十二詠」と「狀江南十二詠」の二作は、いずれも四時十二月の長安と江南をテーマとして一人一首ずつ交替で詠ずる形式であり、その點を見れば酒令歌辭の性格を帯びていふと言ふことができよう。かつ「三三、六、六六、六六」といふ句法を持つ「憶長安十二詠」と、句法は五言四句でありながら江南の美景を描くことをテーマとする「狀江南十二詠」とに、氏は敦煌文書に残る「憶長安」詞や、張志和

の「漁父」詞、白居易の「憶江南」詞など、初期の詞作品との類縁性を認めている。これらの點は、任半塘、王小盾「兩氏の説を受けて展開されたものだが、浙東詩人群の活動の中に位置づけた上での議論であり、その意味で評價できる。酒令と詞の關連については任、王兩氏が夙に指摘されているが、なお定説となるには到っていない。賈氏の指摘はこの問題に踏み込んだものではないが、問題點の多い初期の詞をめぐる議論に一石を投じるものと言えよう。一方浙西詩人群の活動において、詩會の持つ意義が參會者に自覺されていたといふ指摘は、本章では必ずしも十分に説明されていないが、皎然に關する氏の研究を合わせ見れば首肯しうる。氏が引用する「會異永和年、才同建安作」(「水堂送諸文士戲贈潘丞聯句」での陸羽の聯)など、彼らの聯句や唱和詩には、過去の文宴に模しつゝ詩會の意義を詠う例が少なくない。共に詩文を作るところに宴集の喜びが有り、詩によつて友と會するといふ認識は、後世の文人達の雅宴と共通するものがある。また陸羽に代表される飲茶の風習の廣がりも、文人趣味といふ點で注目されよう。賈氏が引

かかっている皎然の「晦夜李侍御夢宅集招潘述湯衡海上人飲茶賦」詩には、琴・詩・茗・花・隱・僧が盛り込まれているだけでなく、中に「茗愛傳花飲」と「傳花飲酒」ならぬ「傳花飲茗」の風趣が描かれている。生活態度の上から「文人」と見なしているのは、元和期の白居易らからであろうが、文人意識と呼べるものは、皎然ら浙西詩人群の中にもすでに廣く存在していたと言えるだろう。聯句のみならずこれらの點でも、大曆の詩人群は元和期の詩人達の先驅けとなる役割を果たしていたと認めなければなるまい。なお賈氏は浙西詩人群の活動における注目點として、もう一つ『韻海鏡源』の編纂を擧げているが、この點は次項で合わせて觸れたい。

初唐期の詩の發展との關係については、聞一多氏の「類書與詩」(全集第三冊「唐詩雜論」所收)を始めとして從來から指摘がある。類書や總集は一面で詩文を作るための工具書という性格を持つており、それ故その編纂は新たな作詩人口を呼び込むことで詩作の隆盛を導く一方、結果として詩の大衆化を招来するという側面を合わせ持つ。聞氏の言われるように、類書の廣がり「事を用いて意を忘る」ような「類書式」の詩を大量生産させる側面が有ることは確かだが、しかし一方で聲律、作法、規範的な詩語などに對する意識の高まりが、新しい形式を完成させる力になることも、決して無視できない。類書の功罪のうち、賈氏は功の側面を重視されており、本章での三大修書學士群に對する考察も、類書や總集の編纂が律詩の定格の形成と重なる點に一番の力點が置かれている。最初に高宗、則天武后朝における『文館詞林』一百卷、『三教珠英』一千二百卷など十三種、總計四千五百七十九卷に及ぶ類書、總集の編纂の情況が表の形で示され、修撰者、時期、奉勅撰か私撰かの別などが、先行研究の成果を踏まえつつ整理されている。

これにより、編纂が盛んに行われた當時の情況が一目瞭然であるが、とくに注目されるのは、律詩の定格の普及に關する氏の假説である。まず元兢、上官儀ら高宗朝の學士達の著述を通じて聲律、對偶、表現技巧の三點に人々の關心が集まっていたことを述べた上で、『珠英學士集』の殘卷を事例に實作の情況を確認し、その時點（七〇一年）では律詩の定格に合致する度合いは高くなく、これが必ずしも自覺的、普遍的に用いられていなかったことを明らかにする。そして定格の普及にはむしろ進士科の試験に詩賦が課せられたことが大きな意味を持ったであろうことを説く。

そこで氏は、共に珠英學士群の一員であり、律詩の定格の完成に力が有つたとされる沈佺期和宋之問が、それぞれ長安二年（七〇二）と景龍二年（七〇八）とに知貢舉を務めてゐることに着目し、この時期に詩歌が試雜文の一つに加えられ、かつ聲律、對偶、作法に關する理論を實踐に移した格式を定めたのではないかと推測している。律詩の名も、この格式に則つた詩であるが故にそう呼ばれたのではないかと言う。説の當否は即斷できないが、興味深い假説であ

ると思われる。また珠英學士群の一人である崔融の撰述である『唐朝新定詩格』が、現在は佚書となつていて確認できないものの、あるいはその定式を示した書であつたのかもしれないと推測される點も興味深い。ところで上編第四章の浙西詩人群の活動でも、顏真卿による『韻海鏡源』の編纂が、詩人達に集會の機會を與え、新たな關心を呼び起こして、湖州を中心とする詩壇の形成に寄與したことが指摘されていた。大規模な編纂事業が、それに携わつた人々を始めとして、その時期の文化に大きな影響力を持つことは、初唐期に止まらない一般的な事象と言えよう。それに關連して、論旨からはやや外れることであるが一言付け加えたい。評者は本年四月中旬に安徽師範大學で開催された第六回李商隱國際學會に参加したが、そこでの發表に查屏球氏の「李商隱《金鑰》考述」があつた。「金鑰」は『新唐書』の本傳や藝文志などには記載されておらず、『通志』「藝文志略」や『直齋書錄解題』など、宋代の目錄に至つて李商隱の著述として記録されている類書である。すでに佚しており、その内容については知り得ないが、查氏は類

書の編纂と「瀬祭魚」と稱される李商隱の作詩法、とくにその用典の精妙さが関連する可能性を指摘されている。これも興味深い論點と言えよう。このように類書と詩の關わりは、なお様々な事例を通じて論じられるべき問題點であると思われる。

最後に附編第三章の韓孟詩人群についてであるが、ここでは貞元十二年（七九六）から十六年にかけての汴州、徐州における集會と、元和元年（八〇六）から六年にかけての長安、洛陽での集會の前後二回に分けて、主として韓愈、孟郊兩者の詩風の變遷と相互の影響關係を説いている。

「集會總集」と「詩人群」というテーマの元に纏められた本書の一章であるから、當然の立論ではあるが、前後二回の集會を軸に韓孟の文學を論じる試みは目新しい。そして前期は「醉留東野」詩の「低頭拜東野」の句を借りて、韓愈が孟郊から多くを學んだと見、後期には陽山への貶謫を経て詩風を變化させた韓愈が、孟郊をも含めてグループをリードしたと見るその論旨も明快である。「詩人群」を構成した李翱、張籍、張徹、盧仝、劉叉、賈島らの活動と、

彼らが韓孟から受けた影響についても、先行研究を踏まえて論及されている。全體として、韓孟のグループの文學活動と交流について新たな視點から纏め直したものと評價できる。ただ韓孟の二人に關して言うならば、前期の集會が特筆される理由はやや曖昧であると思う。兩者は貞元八年の科擧で明暗を分けているように、より早い時期に出逢っていた。また徐州での集會には、孟郊は加わっていない。韓孟に限定すれば、長安での出逢いから、汴州での「遠遊聯句」までを一括りとすべきだったろう。これは、敢えて新しい觀點を示すために生じた瑕瑾と言うべきであろうか。しかしながら評者にとつて些か不満であるのは、後期の文學活動の中心となる聯句についての議論が甚だ不十分なことである。大曆期の兩浙の詩人群によつてその魅力が再認識され、新たな展開を見せた聯句は、元和期の詩人達にも積極的に受け繼がれた。そしてより直接的に繼承した白居易、劉禹錫らの聯句に對し、韓愈、孟郊らの聯句は從來に無い新しい魅力を見出したのである。この韓孟聯句の持つ特徴と意義についてはすでに様々に論じられて來ているが

(川合康三氏「韓愈・孟郊(城南聯句)初探」——中國文學報六一冊)など、やはり本章において賈氏の見解を詳しく聞き取った。元和元年の秋に集中的に作られた彼らの作品は、

聯句が本來的に持つ遊戯性を越えて、文學的な實驗という趣を持つていた。「城南聯句」を筆頭とするそれぞれの作品は、ほぼ作品毎に形式が異なっている他、表現面でも様々な試みがなされている。聯句が正統的なジャンルではないことをいけば逆手にとつて、常識にとらわれずに試みられた、大膽な實驗であつたと思う。韓愈と孟郊は聯句制作を通じて互いに技量を競い、刺激し合つており、それぞれが果たした役割に對して單純に甲乙をつけることはできないだろう。當然のことながら、個々に分析を加えた上での立論でないと十分な説得力は持ち得ない。本章の論述には作品の検討が省略されているため、韓愈が主導し、孟郊もその後をついて行かざるを得なかつたと斷ずる賈氏の見解に對しては、直ちに同意しがたい。「城南聯句」に代表される韓孟聯句は、座の文學が本來的に持つ遊戯性が、新たな文學の可能性を開く契機ともなりうることを示す顯著

な事例であるから、「集會總集」と「詩人群」をテーマとする本書では、より大きく取り上げられて然るべきだつたと思う。

最後で些か不満を述べることになつたが、これは評者の望蜀の論であり、本書の價値を減ずるものではない。「集會總集」と「詩人群」という新しい視座を提供しただけでなく、一方では書誌的研究を基礎とする中國學の良き傳統を守つていることも、本書の優れる點と言える。題詠、唱和、聯句などの座の文學、及びこれに加わつた詩人達の交流などに對する研究は、我が國でもすでに少なからぬ成果を擧げているが、今後はその基礎に立つて、同時代の異なるグループ相互の關係、あるいは時代を越えた影響、繼承關係など、より大きな視野から検討を進めて行く必要があるだろう。本書はその際の一つの據り所となると思われる。

(北京大學出版社、二〇〇一年六月、五七三頁)